

氏名・（本籍地）	米 山 孝 子（東京都）
学 位 の 種 類	博士（文学）
学 位 記 の 番 号	乙第 82 号
学位授与の日付	平成 21 年 3 月 16 日
学 位 論 文 題 目	行基説話伝承の研究
論 文 審 査 委 員	主査 大 場 朗 副査 山 田 昭 全 副査 多 田 孝 正 副査 清 水 宥 聖

米 山 孝 子 氏 学位請求論文審査報告書

「行基説話伝承の研究」

論文の内容の要旨

本論文はⅣ部構成（全十二章）に序章・終章を付し、二資料を翻刻紹介している。以下各章ごとにその論旨を記す。

序章 行基説話伝承の研究対象と研究史

本章では、行基説話伝承の研究対象を、行基に関する国史・墓誌・年譜等を第一次資料、行基関係寺院で作成された資料（伝・遺戒状・講式・絵詞・和讃等）を第二次資料、第三者的な立場で編纂された説話集中の行基説話を第三次資料として、それらの成立や内容を紹介、その上で筆者の研究概要を成果も含め説明する。研究史ではこれまでの主要論文を踏まえながら、自己の研究成果をまとめている。

第Ⅰ部 説話集の中の行基伝承

第一章『日本霊異記』の行基説話

第一節「行基の神通力説話」では、『日本霊異記』に収載された行基の七つの神通力説話に考察を加え、「行基に限らず聖・聖人と評され神通力を発揮する僧侶の説話は、経典から導き出される思想と中国高僧伝の内容との二つが重なり合うような形で成立している」と結論している。

第二節「行基と智光の関係説話」では、『日本霊異記』『三宝絵』『日本往生極楽記』に見える「智光の墮地獄説話」を取り上げ、三者の叙述内容の異同を詳細に検討した結果、この説話の背景に当時の三論宗と法相宗の対立を想定するとともに、特に「真福田丸説話」は、行基伝承から転化された要素が付随して生成していったと論じている。

第二章『三宝絵』の行基説話

本章では、『日本霊異記』の行基説話七話を取り込んで一話として語られる『三宝絵』の説話に、文殊の化身である行基に会いに来た婆羅門僧正説話が付加された点に着目し、その成立背景を考察している。その結果、背後には『華嚴経』等の経典、『古清涼伝』等の中国説話集、五台山信仰などの文殊値遇説話

の影響があることを指摘する。

第三章 『日本往生極楽記』の行基説話

第一節 「行基誕生説話の成立」では、『日本往生極楽記』の段階で行基の誕生譚が付加され、誕生から死までの行基説話が成立した点を指摘する。中でも行基の異常誕生譚の付加の意義を考察し、捨て子のモチーフに再生の論理を重ねて特殊な能力を発揮する人物に造形され、行基の高僧としての聖性を高めている点を明らかにしている。さらに、この誕生譚は後続の『行状記』『絵詞』『講式』等の行基伝に組み込まれて、貴種の聖人や文殊の応現という超人的な人物造形を獲得していった、と結んでいる。

第二節 「行基説話から行基伝へ」では、『日本霊異記』『三宝絵』『日本往生極楽記』『行基菩薩伝』『年譜』『講式』『絵詞』『行状記』『和讃』等の行基伝を通観し、行基像が増幅していく過程を考察している。また、増幅の背後にある事由についても考察を加え見解を示している。

第Ⅱ部 遺誠伝承と『行基菩薩講式』

第一章 行基遺誠伝承の変奏

本章では、行基遺戒状の遺戒文に着目し、その文言を引用している十二書を取り上げ詳細な考察を加えている。その結果、遺戒文の内容を明らかにし、典拠を明示するとともに成立過程、思想にも言及している。成立過程については、初期に素朴な遺戒文を想定し、それに後の者が自分の立場を反映させて遺戒状が成立したと論じている。

第二章 『行基菩薩起文遺戒状』の成立

本章では、新出の昆陽寺本遺戒状を紹介するとともに、本遺戒状の制作動機の問題を論ずる。『菩薩伝』『年譜』『行状記』等の文言解釈を踏まえた結果、行基寺院の荒廃を防ぎ結束を高める目的と今後の寺院の運営維持に当たる別当職への諫言を添加したのが『遺戒状』であると結論している。また、この考察を通じて、本遺戒状の成立時期についても新見を提出している。

第三章 『行基菩薩講式』の成立

本章は、以前著者が翻刻紹介した高野山大学図書館蔵金剛三昧院寄託本『行基菩薩講式』をもとに、本講式の内容と成立について論じている。講式の内容に着目しながら金沢文庫蔵『諸経要文伽陀集』との書承関係を踏まえて、本講式の成立時期を限定、新たな説を提出している。さらに、講式の内容の精査を通して、南都における行基信仰の実相に言及している。

第Ⅲ部 縁起絵巻の中の行基像

第一章 『行基菩薩行状絵伝』と『行基菩薩縁起絵詞』

本章は、『行基菩薩行状絵伝』と『行基菩薩縁起絵詞』の中の行基像を考察し、そこに付随する問題を検討している。『絵伝』では、本書が「絵解き」の形で公開された点を指摘、『絵詞』では、先行研究の誤り（翻刻文）を正している。また、十八種の行基関係絵巻を整理・分類して紹介し、縁起絵巻によって行基伝承が流布した実態を明らかにしている。

第二章 『東大寺縁起』と『東大寺縁起絵巻』

『東大寺縁起』と『東大寺縁起絵巻』中に展開される行基像を考察した章。著者は、両絵巻には他の絵巻に見られない伊勢神宮や宇佐八幡に祈誓する行基像があり特異なものとなっている点に着目、それを糸口に、天照の本地を盧遮那仏とする両部神道の思想を援用しながら、伊勢神宮の経営と仏教側からの勧進活動の宣伝とが共通利益となって、神に祈る行基像が想像されたと論じている。

第三章 高倉寺宝積院蔵『行基菩薩伝絵巻』の特徴

本章は、高倉寺宝積院蔵『行基菩薩伝絵巻』の絵詞と絵図に考察を加えた論考。まず、絵詞の典拠を検証し、室町期成立の『行基大菩薩行状記』が出典であることを指摘。次に絵図と絵詞の考察から、成立背景に言及している。考察の結果、『絵巻』の自院建立の場面に墓地が描かれ、そこに聖武天皇から三昧建立許可の綸旨を賜ったことの絵詞があることから、墓地を管理する三昧聖たちの職掌権と深い関わりがあり、それが本絵巻の成立に影響を及ぼしているとしている。

第Ⅳ部 日本図作成伝承と三昧開創伝承

第一章 行基の日本図作成伝承

本章では、行基の日本図作成伝承をとりあげ、本伝承の成立背景を伝存する日本図や『溪嵐拾葉集』等に着目しながら考察した論考。著者は、中世における神仏一体の思想信仰が日本国土のありように対して様々な解釈を生んでいく中世仏教世界に、神と仏を繋ぐ行基像が利用された結果成立したのが本伝承と結論する。

第二章 『日本霊異記』撰者の景戒の周辺と三昧開創伝承

本章は、行基の三昧開創伝承がどこまで遡れるかと、行基と三昧開創伝承が結びつく要因を、『日本霊異記』の撰者景戒周辺まで遡って検討した論考。三昧聖の文献や先行研究を踏まえながら、『日本霊異記』の火葬の記事十一例と景戒自身の火葬の夢を糸口にして、考察を重ねた結果、『日本霊異記』に火葬の事例が多いことから、三昧聖と火葬が結びつく遠因がそこにあったのではないかと論ずる。

第三章 『行基菩薩和讃』の特質

本章は、三昧聖玄悦によって刊行された『行基菩薩和讃』をとりあげ、その内容と成立背景を考察している。先行する主要な行基関連資料と比較検討した結果、『和讃』が『講式』の内容に対応していることを明らかにし、三昧開創の内容が中心となっていることも指摘している。成立の背景としては、家原寺を中心とした同志が行基を讃仰し結束を高めるものとして和讃は機能していたのではないかと結んでいる。

終章 寺院における行基伝承の現状

本章は、現在まで調査が行われた行基寺院 1427 カ寺の分析報告で、本論文でとりあげた各種の行基伝承が現在の行基寺院に伝承されているかどうかを綿密に分析している。その結果、開基伝承、造仏伝承、温泉の開湯伝承、三昧伝承等、古代から近世に至る伝承と乖離することがなかったと論じている。

審査結果の要旨

行基（668－749）は奈良時代の高僧である。諸国をめぐって民衆を教化するとともに、造寺、造塔、池堤構築、橋梁架設などの社会事業も展開した。このため広く民間に崇敬され、中古、中世、近世を通じ異能の高僧として説話など伝承の世界に語り継がれてきた。

本論文は行基の説話などを広く収集し、伝承の発生、流伝、変容の軌跡を精細に追究したものである。

論者は序論において先ず行基の伝承資料を第一次資料（国史、墓誌、年譜）、第二次資料（行基伝、遺誡状、講式、絵詞、和讃）、第三次資料（説話集中の行基説話）に分類している。この区分は（一）青史上の行基、（二）信奉者らが見た行基、（三）第三者的立場の人々に関心を持たれ、伝承された行基という観点からの区分で、学問的に資料を取り扱い、処理するとき、当然留意しなければならぬ妥当な区分といえる。また論者はこれまでの行基研究を系統的に整理し、その成果を客観的に把握するとともに、残された研究課題についても展望している。論者の誠実な学問的姿勢がうかがえて評価できる。

さて、第一部は「説話の中の行基伝承」と銘打って、『日本霊異記』『三宝絵』『日本往生極楽記』など

に収載される行基説話を取り上げている。前記第三次資料について考察したものである。『日本霊異記』における七個の行基説話は行基を、超能力を持った聖人として描くが、こうした人物像は梁高僧伝のような僧伝のスタイルを模し、かつそれに維摩経に見られるような菩薩像をかぶせて形成されたものであろうと論じている。また行基と智光の二者関係の説話―真福田丸説話を取り上げ、これが『日本往生極楽記』『今昔物語』『奥義抄』以下の歌学書に伝承される過程で変容する軌跡を追い、根底で行基二生説を応用して説話が形成されたであろうとしている。また『三宝絵』の説話は五台山信仰に並行して台頭する文殊値遇説話のパターンが応用されているだろうとする。さらに『往生極楽記』にみる異常誕生譚は捨て子のモチーフに再生の論理を重ねて特殊な能力を発揮する人物に仕立てられているとする。そしてこのように説話に造形された行基像は次代の行基行状記、絵詞、講式などに継承されて行くと結んでいる。

以上の論述は傍証資料や先行研究を参照しつつ進められ、おおむね妥当な結論に達したもので、論者のオリジナルな業績と認められる。

第二部では近年木下資一氏によって発見紹介された『行基遺戒状』と論者が発見紹介した『行基菩薩講式』の二書を取り上げ、詳細な考察を加えたものである。『行基遺戒状』は宮内庁書陵部本ともう一本論者が紹介した昆陽寺本とがあるが、論者はこの二本を比較校訂するとともに、『行基菩薩伝』『宝物集』など中古中世に成立した十二の作品に引用されている遺戒状文句をすべてあげて、今日見る遺戒状本文は『行基講式』が成立した1235―1277年までの間に重層的に成長して成ったものであろうとしている。また遺戒文に章安灌頂の『観心論疏』、安然の『真言宗教時義』を出典とするところがあることを指摘し、台密系の思想が流入していると論じている。こうした新たな発見と指摘は論者の優れた成果として高く評価できる。

いっぽう『行基菩薩講式』は高野山金剛三昧院に所蔵される本を論者が見出し、これを翻刻紹介したことによって学界の注目を集めたもので、論者はこれについても新たに有馬温泉薬師堂に一本が所蔵されている可能性を指摘するとともに、金沢文庫の『諸経要文伽陀集』の中に『行基講式』の和歌伽陀五首が取り込まれている事実から、本講式成立の下限を釧阿の『諸経要文伽陀集』書写の建治三年（1277）以前だと限定している。これは行基の説話伝承を研究する上で画期的な業績として高く評価できる。

第三部では縁起絵巻等に描かれた行基像について考察している。はじめに十四世紀前半に家原寺で製作された三幅の大型の『行基菩薩行状絵伝』が絵解きに用いられたものであろうとし、十八種の絵伝の存在を紹介している。またこの絵伝に付随する絵詞を翻刻している。これによって行基信仰流传の実態が明らかになってきた。また『東大寺縁起』『東大寺縁起絵巻』に行基が伊勢神宮、宇佐八幡宮に祈誓している姿が描かれていることを指摘して、行基が両部神道思想の中に取り込まれて鼓吹されたとしている。また高倉寺宝積院に伝わる絵巻には自院建立の場に墓地が描かれていることから、この絵巻は三昧聖たちの什物で非公開のものだったろうとしている。縁起、絵巻という視覚媒体から行基伝承にアプローチしたのは論者が最初に試みたもので、優れた独創的成果として評価できる。

第四部「日本図作成伝承と三昧開創伝承」では行基作といわれる日本地図は中世に神仏一体思想の伸展に伴って日本の国土意識が高まる過程に作られたもので、民衆布教のため全国を巡行したという行基に付会して創作したのであろうと推測している。また行基信仰集団が三昧聖と密接に結びついていることに注目し、その淵源を『日本霊異記』にまで遡ってさぐり、帰化人の末裔とされる行基信仰集団が火葬の技術を持っていて、それが行基信仰と三昧聖を結びつける要因になったのではないかと推測している。そして最後に行基和讃を取り上げ、三昧聖玄悦によって板行された和讃は歌詞に講式、高倉寺の絵巻などと重な

るところがみられるところから墓地管理を職掌とする行基集団の中で発生し流行したものではないかと推測している。第四部の諸論は推論にとどまり実証のレベルに達していない点惜しまれるが、しかしこうしたテーマを考察の対象として資料を集め、俎上に乗せたのは今までなかったことで、その点論者の業績と認めることができる。

以上序章以下四部ごとに、本論文の評価を概括してきたが、改めて全体を俯瞰して総体的に評価してみると、本論文は「伝承」という実態の把握にくい対象に立ち向かうのに、在来の研究や資料を網羅的に蒐集整理したことは勿論、新たに諸資料を発見、分析して、今まで知り得なかった新知見を少なからず斯界に提供した、その点高く評価して我々は本論文を学位に相当するものと認定する。